

日本事情Ⅱ

最終レポート

名前：グエン ミン トアン。

グエン ミン トアン

2009/01/24

内容

最終レポート	2
1. アイディアメモ	2
2. テーマメモ1	2
先生の魅力	2
3. テーマメモ2	3
4. インタビューする内容 :	4
教師の仕事について、聞きたいと思います。その教師の仕事に観念と考え方から、瀬谷先生の性格ともっと分かりたいと思います。普通、私と話し合ったら、いつも、笑ったり、楽しくはなしました。先生について、面白い人の面が分かりましたが、先生の真面目な考えとか、真剣な考えが話し合ったことがまだない。今回のインタビューから、その面がもっと、分かりたいと思います。	
5. インタビュー結果ラフ	4
インタビュー	4
6. インタビューについて結論	7
7. このクラスについての感想	7

最終レポート

1. アイディアメモ

・インタビューする人の紹介

私は日本語を教えた先生にインタビューしたいと思っています。その人は自分にとって、大切な人です。二人目の母のように見えます。日本に来て、一人暮らしで、日本語のことも生活のことも、それに、進学のこともしろいろ心配していました。その時、先生は熱心に勉強と生活のこと世話になりました。先生は自分の考えで、面白い人だから、いい答えが出られると思っています。

2. テーマメモ1

先生の魅力

私はインタビューにしたい人が瀬谷という人です。瀬谷先生は私を一年半ずっと、日本語を教えました。

印象的なエピソードは顔です。いつも優しい顔を持っています。相手に怖くさせないようにします。

瀬谷先生は自分にとって、魅力的な点は

始めは話し方です。いつも相手の話をよく聞き、分かるまで、聞いています。自分の考えですが、相手のことに同感という感じがさせました。私は日本に来て、最初の時日本語が下手し、話したいですが、話せないということが多いです。だから、そういう瀬谷先生に付き合えて、良かったと思いました。

つぎは熱心な教え方です。分からない時分かるまで、説明します。そういう先生は学生にとって、とてもいいことと思っています。実は私が先生だから、学校で、勉強のことが熱心に教えるのは当然だという考えもありました。だが、勉強のことだけじゃなくて、生活のことや、人間関係の対応し方などまでも教えてくれました。とても感動しました。先生はその時ベトナム語も勉強してみました。ベトナム語は日本人にとって、難しいとおもわれていますが、時々、授業で、ベトナム語もしゃべっています。自分にとって、とてもうれしかったです。先生も頑張ってベトナム語を勉強しますから、私も日本語も頑張りたいと思っています。

3. テーマメモ2

私はインタビューしたい人は瀬谷みゆき先生です。彼女は赤門会日本語学校に勤めた先生です。一年半世話になられた私は先生のことを忘れない。どうして先生にインタビュー相手に選んだ理由は日本の教師の職業の人の考えについて、もっと分かりたいと思います。実は父と兄みんな教師をしています。だから、教師の仕事について、大変さがとても分かります。ベトナムでは教師という職業は金持ちじゃない仕事ですが、尊敬されています。理由は簡単ですが、教える人がいないと、自分でたたく勉強とも仕事ともできない。だから、ベトナムの学生はみんな先生にとっても尊敬して、怖い気持ちとも言えます。でも、韓国とか日本の学生の考えに聞いたら、そうじゃないという答えがもらいました。私の考えがなんか平等な関係ともわかられます。なぜなのか？日本人の先生の気持ちももっとわかりたいと思います。

先生のこと魅力というか印象的な点は優しく親切な人です。やっぱり、他の人から情報をもらって、人の性格を判断するのは難しいですが、みんなの班でがんばって、私の先生にイメージしてみます。ほとんどみんなはおとなしく親切の性格をもっている人と言えます。

二年前のことですが、その時期は私だけじゃなくて、ほとんどベトナム人の留学生はそういう気持ちが誰でも過ぎしました。初めて、外国に行って、初めて親から離れて、自立の生活が始めました。だが、言語はその時はまだ、初級

日本語のレベルで、あまり普通の会話もできなかった。新聞配達しながら、日本語が初中級から勉強していました。日本人なら、多分そういうことはとても普通ですが、小さいころから勉強と遊びほか知らない私はその時とても辛かったです。勉強の成績もクラスでベトナムの3人いつもラストだった。クラスで、韓国の留学生17人ですが、ベトナム人3人しかいない。けっこう、韓国語は日本語になんか似ていますから、韓国の学生のほうが日本語を勉強するのが速い。最初、瀬谷先生は他の韓国の留学生のように熱心教えました。ある時、私はなんのきっかけで、ベトナムの留学生にいろいろな世話にしていたか先生に聞いてみました。今宇都宮大で、勉強している友達はいたずらか、偶然か先生に母と呼ばれた時から、ベトナムの学生たちに世話にしたい気持ちがありました。それで、クラスで、休憩のときもいろいろな話かけたり、一人の生活にアドバイしたりしました。1か月1回ぐらい渋谷とか、東京の有名なところに私たちに連れて行きました。それに渋谷にあるベトナム料理の店で、食事をします。恥ずかしいですが、全部先生はお金を払いました。私たちははじめとても恥ずかしいで、こっそりさっきにお金をはらいました。だけど、先生に怒られました。将来、就職できたら、その時、払っても、まだ遅くないと先生がそういった。ある時、先生の家までも連れて行きました。ベトナム人なら、家族と食事するのは毎日のことだから、日本に来ていつもさびしい一人を食事するのはとても辛かった。長い時間、また、家族の雰囲気にごせる時間は自分にとってとてもうれしかった。一番感動したのは大学受験したときだった。1か月ぐらい、いろんな、アドバイをもらって、どの大学受験したらいいのか、面接のデモ試験も先生と一緒にやっていました。おかげで、秋田大学に合格しました。心から、感謝の気持ちがいっぱいあります。私は恩義をもらったから、払うのはいつまでも払えないけど、絶対いつか払いたいと自分に約束しています。

4. インタビューする内容：

教師の仕事について、聞きたいと思います。その教師の仕事に観念と考え方から、瀬谷先生の性格ともっと分かりたいと思います。普通、私と話し合ったら、いつも、笑ったり、楽しくはなしました。先生について、面白い人の面が分かりましたが、先生の真面目な考えとか、真剣な考えが話し合ったことがまだない。今回のインタビューから、その面がもっと、分かりたいと思います。5.

インタビュー結果ラフ

インタビュー

電話でインタビューしていました。

私：もしもし

瀬谷先生：もしもしどちらさまですか。あら、ベトナムのトアンかしら。(笑)

う)

私：はい、そうです。前はメールでインタビューするつもりですが、でも、やっぱり電話したほうが良いなと思いました。

瀬谷先生：うん、大丈夫ですよ。

じゃ、これから、インタビューさせていただきたいと思います。

質問1：先生、教師の仕事について、どう考えますか？

瀬谷先生：→とてもやりがいのある仕事だと思います。

私：そうですね、前、私も先生は仕事が好きとみえました。日本で職員は何時まで仕事をやるのは知りませんが、けっこう遅くかえりましたね。

質問2：先生、どんなきっかけで、教師になりましたか？

今まで、教師をしている時、一番辛い思いをしたのはどんな時ですか？

また一番幸せを感じたのはどんな時ですか？

瀬谷先生→8年前、韓国の留学生との出会いが私の人生を大きく変えました。親元を離れ、自分で生活費や学費を稼ぎながら、一生懸命日本語を勉強している留学生の力になりたいという思いで日本語教師を目指しました。

私：前は赤門会日本語学校で、一緒に日本語を勉強した友達もそうだったね。でも、みんなもう年上かな。ほとんど、23歳です。私達だけまだ18歳です。若いですね。

瀬谷先生； そうだ。でも頑張って勉強したよ。

私：まあ、日本にせっかく来られて、日本語をたくさん勉強ほうが良いと思います。

瀬谷先生→辛い思いをしたのは、学生のことを考えて注意したことがちゃんと学生に伝わらなかったことです。

→幸せを感じるのは、卒業した学生がいつまでも忘れずに連絡をくれることです。

私：そうですか。私もよく連絡しましたね。また東京に戻りたいです。でもなかなか機会がないな。

質問3：教師をしていて、困ったこと、難しいことはどんなことですか？

留学生をどう思いますか(様々な国から来た留学生は国によって違いがあると思いますか?)

日本人の学生とはどうちがいますか？

瀬谷先生：→日本人の本音と建前、また婉曲表現について、留学生はある程度の知識をもって日本に来ていますが、そのことを理解しているというより、やっぱり日本人の悪い部分だという意識をもっている学生が多く、それをどう肯定的に理解してもらおうか苦労します。

私：難しいですね。やっぱり、私も先生によく話し合いました、分からないこともいっぱいありますね。

質問4：学生には良い学生もいる、悪い学生もいる、そういう考えがありますか？

学生の態度についてよく考えたことがありましたか？

瀬谷先生：→良い学生、悪い学生というふうに考えたことはありませんが、はっきりとした目的や目標をもたず日本に来る学生が多いことに驚かされます。

→二十歳を過ぎた学生がほとんどですが、子供の頃、親にどんな躰をされて育ったのだろうと疑問に感じる礼儀やマナーの悪い学生が増えています。

例えば、火のついたタバコの吸い殻を窓から外に捨てたり、唾をあちこちに吐いたり、食べ物の包みを机の中に入れてばなしにしたり、これはほんの一例です。

私：たばこか。私は吸ったことがないけど、やっぱりベトナムの学生はあまり吸わないな。

私の父も教師の仕事をしていました。父の話によると、教師の仕事には、とても大きな意味があります。学生を正しい道に導かなければなりません。教師の仕事は知識を教えるだけではなく、徳を教えなければなりません。どうすれ

ば、学生に信頼してもらえるのか。その信頼感があれば、学生にやる気を起こさせることもできるし、悪い学生もいなくなります。一番の幸せは、学生が無事卒業し、正しい道に進むことです。しかし、卒業していく学生との別れは、とても辛かったと言いました。教師は自分の利益は考えません。それについて、先生はどう考えますか？

日本人の先生とベトナムの先生の考えは同じですか？

瀬谷先生：もちろん、同じです。

私：ご協力ありがとうございました。

コメント：インタビューしたとき、先生は私の間違った日本語を直してくれて、本当に感動しました。先生の真剣な考えから、どうして学生にとって、熱心に教えることが理解できました。

6. インタビューについて結論

家族の中には3人まで教師だから、私はある時、教師の仕事に興味がありますが、大人になって、他の人に説得力がないと大勢の人に苦手だから、その夢は現実になれない。実、瀬谷先生が教師を選んでいる理由は主婦の仕事がつまらないだから、その仕事をしているかなと思っていました。でも、どうして先生が仕事にとって、そんなに熱心するのか理解できなかった。だが、今回のインタビューではその動機が韓国の留学生の出会いのおかげで、日本語教師を目指したと分かりました。外国人の私達のために頑張るといえるでしょう。とても、深い意味です。それがひとつの理由で、私にとって、先生が大切な人が考えました。私の目的も今回のインタビューによると、達成しました。本当に日本人の本音と建前、また婉曲表現について、留学生はある程度の知識をもって日本に来ていますが、そのことを理解しているというより、やっかいで日本人の悪い部分だという意識をもっていることが自分の場合でも、ある時、考え間違いました。でも、落ち着いて、考え直したら、間違ったと分かりました。やっぱり、私はまだ子供の考えをもっている、先生の大人の考えにとって、勉強になりました。これは二つ目の理由です。

7. このクラスについての感想

はじめて、こういう形で勉強しました。教科書なし、みんなとテーマについて、話し合っ、討論して、結果を出す。いろいろな有益な意見とアドバイスをもらいました。でも、自分はこういう意見があります。MLメールがありますが、

みんな課題を提出だけで、もっと、使って、話し合いとかアドバイスとかやったら、よかったです。

日本事情Ⅱ

インタビュー

教育文化学部
G14 韓・ユル

目次

第一章 テーマメモ2	1
第1説 インタビューの相手	1
(I) 友達になったきっかけ	1
(II) ヨンファン君とのエピソード	2
(III) ヨンファン君はどんな人?	2
第2説 インタビューしたい理由	2
第3説 インタビューの内容	2
第二章 インタビュー	2
第1説 日本留学の生活について	2
第2説 留学に来て感じたこと	3
第3説 留学後の計画	4
第4説 その他	4
第三章 結論	4
第1説 インタビューの感想	4
第2説 「日本事情□」を振り返って	5

第一章 テーマメモ2

第1説 インタビューの相手

私は今、日本の大阪にある「大阪産業大学」という大学で留学をしているチョン・ヨンファンという友人をインタビューしようと思っています。ヨンファン君は、私と同じ大学の同級生であり、二人とも日本語に興味があって、出会ってすぐ友達になりました。この頃の人とは違って情けの深い人だと思っています。

(I) 友達になったきっかけ

チョン・ヨンファン君は大学1年生の時に同じ大学の同じ学科でしたし、二人とも日本についてい

ろいろ関心がありました。そして、一番の友達になったきっかけはやはり二人ともお酒が好きで、その頃は毎日のようにお酒を飲んだりしました。試験の期間にはヨンファン君が一人暮らしをしていたので、一緒に夜の目も寝ずに日本語を勉強してきた私にとって一番中がいい友達です。

そして、日本語だけでなく、いろんなどころ、お酒とかゲームとか運動などを二人でライバルになっていつもお互いに勝とうとしたりしました。でも、私が、「大阪産業大学」の留学の面接で落ちた時には誰よりも私のことを心配してくれたり、慰めてくれたりしました。そして、今、ヨンファン君と同じ国にいたとしても遠すぎて、会えないので聞きたいことがたくさんあります。

(II) ヨンファン君とのエピソード

ヨンファン君とのエピソードといえば、やはりお酒は欠けないものだと思っています。ヨンファン君が寒い冬に軍隊から休暇を得て、日本語能力試験を受けようとなりました。そして、3泊4日の休暇。ヨンファン君にとっても久しぶりの休暇だったので、試験の前日に一緒にお酒を飲んで次の日の朝、タクシーの乗せてヨンファン君を試験のところまで送ったことが思い出しました。結果は、やっぱり落ちましたが、今はあの時の見たいにお酒も飲めないし、試験があったら遊びもできないので今、考えてみたら愚かだった時代だったけど、本当に大切な時代だったんです。

(III) ヨンファン君はどんな人？

ヨンファン君は学校から家が遠すぎて高校時代から一人暮らしをしてきて同じ年の他の友達よりももっと大人らしい感じがしました。それで、入ったばかりの時から1年生の代表したり、学校の委員をしたりして同じ同級生たちをよく導いてくれました。また、田舎から来たので、顔つきも少し、田舎っぽく見えたとし、行動や言い方も他の皆とは少し違っていましたので、私はいつもいも臭いだからかいながらもヨンファンクのそのような田舎っぽいところが一番良かったと思っています。

第2説 インタビューしたい理由

チョン・ヨンファン君とは軍隊も同じ時期に行ってきて、大学に戻ってから二人で日本留学のために一緒に勉強をしましたが、残念なことにヨンファン君が私より6ヶ月ぐらい先に日本に来ることになりました。

それで、私はまだ日本に来たばかりなので、まだ何も知らず、聞きたい事もたくさんあります。6ヶ月間、日本での生活や留学している間に考えたことなどをインタビューしてみたら、私にとってもいろんなどころで役に立てるだろうと思ってインタビューの相手に決めました。

第3説 インタビューの内容

インタビューの内容にどうすればいいだろうかといろいろ考えてみました。それで、やはり二人とも日本語を習い始めたころから日本に留学するのが夢だったんです。今はもうヨンファン君は留学の半分ぐらいしか残っていません。それで、七ヶ月の短い間だったけど、留学来る前に思っていたことと今、留学していて思ったこととの違いや感想などをインタビューしたいと思っています。そして、ヨンファン君にとって留学していて一番大事だと思ったのは何かなど、私と来る前話し合ったことがどのようになったかこのインタビューを通じて知ってみたいと思っています。

第二章 インタビュー

第1説 日本留学の生活について

初めて日本で受けた授業は日本事情という科目だった。日本事情をはじめ、僕の受けた授業の8割は留学生向けの授業であった。僕の通っている大阪産業大学という大学では、留学生が早めに日本の

生活に慣れるように留学生向けの日本語の授業が整ってある。基本的な日本語の文法、言葉、慣用文型などを教わるのである。これは凄くいいと思って、一所懸命に勉強してきた。

そして、うちの学校ではランゲージカフェという会話教室みたいなところが整っており、いろんな国の人が尋ねて来、喋りながら日本語を教わることができる場所があつて役に立ったと思う。

日本に来て今までの間、沢山の日本人に会い、掛け替えの無い大切な思い出を作ってきた。井の中の蛙の僕には本当にいい経験が出来て嬉しいと思う。大阪はもちろん神戸、京都、奈良、そして東京まで、あちこちの所へ日本の味を味わいに駆け回ったりして本当に良かったと思う。本当に良かった。

日本に来たばかりの頃も、今までも一番の問題は金銭的な問題であった。学生という身分の僕には避けかねる問題で、現実的な問題でもある。わずかながら奨学金をもらえることになって少しは助かったのだが、家賃はなんとなく納めたのだが生活費まで充当することが出来なかった。そのため、アルバイトをしようとは思っていたが、その時、自分に今一番重要なのは何かと考えた結果、勉強の為に費やされる時間を縮めてまでアルバイトをする必要はなかったと考えた訳である。つまり、アルバイトに拘束されなくなかったのである。今も後悔などはしない。僕は何より僕の考えを信じているからである。

→ やはりほとんどの留学生が悩んでいる 一番の問題は金銭的な問題だと思います。私も今バイトを探してはいますが、そんなに簡単ではないと思いました。私は日本に来る前からヨンファン君にいつもバイトとかして旅行に行ったり、したいことしたりして日本での経験をもっと広めなさいと言っていました。でも、ヨンファン君はいつもバイトなんかしなくても大丈夫だと言ったものでした。私はバイトも一つの勉強だと考えていますが、この質問の答えを聞いて、ヨンファン君がどうしてバイトをしようとしなかったのかが分かる気がします。

第2説 留学に来て感じたこと

日本に来てあつという間に9ヶ月が経ってしまった。逆にいうと2ヶ月しか残っていないことになる。つまり、「ちょうど1年間の留学」ではなく、「10ヶ月間の留学」の方が正しいかもしれない。今年の4月、目指してきた留学が決まり、様々な期待感や覚悟などを抱いたまま韓国を後にして日本に来た。あの頃から8ヶ月が経った今、「後悔」という感じに襲われている気がする。でも、後悔といえば、後悔の対象があるわけだが、僕の場合は後悔の対象がない。いや、見付かられない。日本に留学してから僕は旨くやっているであろう。一所懸命に勉強はしているものの、それだけでは何か充分ではないという気持ちである。誰に教わることも無く、自分で決めて自分で選ばなければならない人生の道を一步一步歩んで行くのが怖いからだろうとしか思えない。やはり、自分の前に置かれている数多くの道の一つを選ばなければいけないというのは怖いものである。

日本語を教わりに日本に来た。日本語だけ最大限マスターできるように頑張ってみようという覚悟を念頭に置いて、自信をもって日本にやってきたのである。考えたとおりの日本語の勉強を続けて来、今もじっくり考えながら日本語で文章を書いている。これだけで、旨くやっていると言えるのだろうかと思つた。

この前、勉強しているうちにふと頭の中をよぎった考えがある。あれは言語の学習にはきりが無いということであり、それは分かってはいたが、きりのない日本語をどのくらい勉強したらいいのかという考えであった。さらに、どのくらいで満足すべきか、どのくらいで、日本語の勉強にだけ注いできた時間を、他の勉強に費やせば良いタイミングと言えるのだろうか。もちろん、今の僕の日本語は下手すぎると思つていながらも誰より日本語が話せたい。まだ日本語は下手なのに他の勉強もしたいと思つている僕が情けないと思う。でも、やらなければ生き残れないというのが今の現実である。自分が好きなことだけをしたら社会の戦争で生き残れない険しい現実、泣きたいくらい残酷である。

じっくり考えた末、出した結論は、いくら嘆いても社会は変わりっこない。その嘆いている時間に1文字でも勉強しようという結論である。そして、沢山の本を読もうと決心したのである。

今まで、全く馴染みのなつた本に興味湧いてきたのは今年の夏休みからである。今はまだ本の初心者であり、読み進むにも結構時間がかかる。でも、最近読むスピードが少しながら早くなつていくのが覚えてくる。日本語で書いてある本を15冊読みきつた。本に書いてあるあらゆる素晴らしい表現にも感心させられた。著者の気持ちが本の登場人物を通じて伝わってくる気もする。本の魅力を今

になってからやっと分かったのが悔しいながら、感心しながら、そして感動しながら読んでいる。読まないといけない本の中にある世界を味わいながら、今日もページをめくる。

→ 私はヨンファン君に出会って以来、ヨンファン君が本を読むのを一度も見たことがなかったんです。それで、この前ヨンファン君が本を7冊も買ったと嬉しそうな声で言って本当にびっくりしたことがあります。ヨンファン君は留学に来て昔とは少し変わったところがあると思っていますが、その中の一つが本が好きになったといっているところです。これは羨ましいことです。私も本を読もうにもよ読めないで、本当に羨ましいことだとおもいました。

そして、この前ヨンファン君が私に日本語についていろいろ聞いたことがありました。私はその時にはいたずら半分にして言いましたが、ヨンファン君がこんなに日本語について考えているとは思いませんでした。私も少し考え直すようになる時間でした。

第3説 留学後の計画

来年2月になると僕は、この日本にはいない。もう70日後には帰国しなければならないのである。本当に残念である。正直にいうと少しは不安である。他の人が、留学をしたら、しかも10ヶ月も留学をしたらぺらぺらになるだろうと思いついでいるのがとても不安である。その思い込みが僕の首を締め付けて来そうな感じである。もちろん僕なりに一所懸命に勉強し続けて来たし、後悔をなるべく残さないようにも努力してきた。だから、帰国してから自分の日本語の実力を評価されたくない。きりのない言語ということを知っている僕の悩みを他の人に分かってもらいたいのである。

日本語の勉強は死ぬまで続けるつもりである。勉強すればするほど面白くなる日本語という言語をやめるわけにはいかない。ただし、現実はそのように甘くはなく、認めてもらいかねるのだから、他の勉強が加わってくると日本語の勉強量が少なくなるのは避けられないのだろうが、死ぬまでしたいと僕は思う。日本語が好きだから。

→ もう私も日本に来て2ヶ月になりました。ヨンファン君と留学に行きたくて一緒に勉強したことが数日前のように思われますが、ヨンファン君はもう2ヶ月後には家に帰らなければなりません。ヨンファン君は帰ると就職せずにもう少し勉強したいと言ったことがあります。でも、この頃はほとんど遊ばずに、図書館とか机の前にはいかないようで、少し心配になります。

第4説 その他

何か真剣しすぎて韓ユル君に笑われるだろうと思うが、僕はいつも真剣である。

→ 私はいつもヨンファン君にお前はとても真剣しすぎると言ってからかったものでした。ヨンファン君の短所かもしれませんし、長所かもしれません。いつも思っていました。何か一つのことを打つ込むとそれ一つしか考えないので、私はいつも文句を言いましたが、今ヨンファン君が最も打ち込んでいることが分かって今後はからかわないで応援したいと思いました。

第三章 インタビューの結論

第1説 インタビューの感想

いよいよインタビューが終わりました。最初にインタビューの相手を決めてインタビューのやり方や質問を搜して皆にアドバイスをもらってからインタビューを行いました。どのように親しいとはいえ、このように話したこともなかったですし、直接会ってしたものでもなかったですので、考えていたより難しかったと思います。でも、これをきっかけにしてこの前から聞きたいことや話し合いたかった事などをインタビューを通して少しだけでも分かるようになった気がします。インタビューを始めてからもう3ヶ月ぐらいい経ちまして、私もどれぐらいは日本の生活に慣れるようになりました。

それで、今インタビューを繰り替えてみれば、ヨンファン君が言った言葉の意味を少しずつ考えてみるようになりました。私も今からは残っている留学の時間をどのように過ごせばいいかをこのインタビューを通じていろいろ考えさせられるようになったと思いました。そしてグループ中だけでなく、他のグループのインタビューしたものを見て、みんなの友達や恋人、知り合いに関するいろいろ分かってよかったと思っています。

私は冬休みに短い時間でしたが、ヨンファン君に会いに大阪まで行ってきました。長い時間をバスに乗って行って、すこし疲れましたが、1年ぶりに会うのですなので気持ちはよかったです。私の降り場に迎えに来てくれたヨンファン君は相変わらず、田舎っぽくて1年前と変わったところがないように見えました。インタビューのしながら昔のことがよく思い浮かべましたが、インタビューの後、直接会って話したり、お酒を飲んだりしながら、インタビューで聞かなかったこととかいろいろ話し合っってすごく楽しい時間でした。ヨンファン君はもう帰る日が迫ってきましたが、私はこれからだと思っています。これからもっと頑張ってから、帰っていったらヨンファン君にいろんな話ができるように日本でのいろんな経験をしてみたいと思いました。

第2説 「日本事情Ⅱ」を振り返って

もう一学期が少しぐらしか残っていません。日本に来てからあつという間に4ヶ月が経ちました。何をしたのかわからないうちにそろそろ春休みに入ります。韓国から日本の秋田に来る飛行機があまりないので、授業が始まる一日前に到着して次の日から授業を受けました。広い講義室で、違う国の留学生や日本の学生がたくさんいたので、初めは少し緊張したと思います。そして、一緒に来た友達とも別れてまだ言葉もよく通じない人とグループになってお互いに話し合える時間が多かったのですが、私が口数の少ない人なのでお互い顔だけみたり別のことをしたりしました。でも、今は授業のことだけでなく日本のこととか韓国やベトナムについていろいろ話し合ったりしています。

授業は韓国にいたときはほとんど日本語と言う語学に関する授業だったのでこのような授業は初めてではないのですが、少し苦手でした。毎週、授業のコメントを送ったり人をインタビューしたりして結論を出すのは本を読んで問題を解くこととは違う難しさがあると思いましたが、その代わりに楽しさもあると思いました。他の学生のインタビューを見てその人の友達や恋人、恩師にほんの少しだと思っていますが、出会ったり話し合ったりしている人々と出会ってみることができたと思っています。

最終レポート

日本事情Ⅱ

江澤 尚

2009/02/02

目次

1. インタビューの相手

1. 1 出会ったとき

1. 2 健ちゃん

1. 3 彼とのエピソード

2. インタビューに選んだ動機と内容

3. インタビュー結果

4. まとめ

5. 感想

1. インタビューの相手

私は、中学・高校と一緒に過ごし、現在大学で理工学の勉強をしている佐藤健介(仮名)という友達にインタビューをしようと考えています。

1. 1 出会ったとき

私が彼を知ったのは、中学校のときでした。小学校6年生のときに秋田に引っ越してきたので、小学校6年生のときから同じ学校に通っていたのですが、クラスが違ったこともあり、彼の名前を初めて聞いたのは、中学3年のときでした。彼は3年生になり、生徒会長とバレー部のキャプテンをやっていました。自分も卓球部のキャプテンをしていて、生徒会長は全校集会であいさつなどもあるので、それらをきっかけに彼の名前を知りました。しかし、まだ彼と話したことがあるわけでもなく、特になにかの活動で一緒になるというようなことはありませんでした。

初めて話したのは、高校になってからだったと思います。私は地元の高校ではなく、電車で1時間ほどの隣の市にある進学校に行きました。ほとんどの人たちは地元の高校に行くので、中学校のころから知っている人はほとんどいません。さらに、私は理数科だったので、入学後7クラスに分けられる普通科とは違って理数科はひとつの同じクラスになります。その理数科に入った3人のうち、中学校のころずっと同じ

クラスだった友達が1人とクラスが違って話したこともない2人。その2人のうちのひとりが健介でした。中学の頃は話したこともありませんでしたが、やはり帰り道や帰りの電車が一緒なので、自然と仲良くなりました。

1. 2 健ちゃん

彼と話すまで、私は彼を結構堅い人だと思っていました。特に理由はなく、単に生徒会長だったからというイメージのようなものでした。しかし、実際に会って話してみると、明るく軽くて、それでいてどこか真面目な雰囲気があり、とても話しやすい人でした。いろいろな人から「健ちゃん」と親しいあだ名で呼ばれている理由が分かりました。クラスでは、ちょっと抜けたところが面白く、はじめのうちからみんなに人気があったように思います。いつもその場の勢いで行動や発言をする人で、時折謎の言葉を発します。それらの言葉の由来はとくにありませんでした。「とても暑い」を「パツツン暑い」などと言っていた時も、「なんでぱつつんなの？」と聞くと、やはり「なんとなく」と答えました。しばらくしてからパツツンについて聞くと、「あれは違うから」などというあたりから、やはりその場の勢いでしゃべっていたのか、それとも誰かが面白がって広げたのか。とにかくみんなに好かれている彼でした。

1. 3 彼とのエピソード

彼について考えるといちばん先に浮かんでくるのは、ゲームが得意だということです。中学の頃はバレー部のキャプテンで、小学校でも野球部だった彼ですが、意外とインドア派で、格闘系のゲームからシューティングやパズル系まで、さまざまなゲームで高い能力を発揮する人でした。私が中学校からやっていたゲームを彼に紹介したのですが、すぐにレベルが追い付かれてしまい、今では彼の方がずっとそのゲームに詳しいです。携帯のミニゲームなども、電車の中などでちょっとやらせるだけでハイスコアが塗り替えられてしまいます。彼はゲームをやっているときの集中力は目を見張るものがあり、周りの声がほとんど聞こえなくなります。聞こえていたとしても、区切りがつくまで反応してくれません。私は昔からあまりゲームはしないほうで、どちらかというと外で遊ぶことが多かったので、彼がとてもうらやましいです。

2. インタビューの相手に選んだ動機と内容

そんな彼をインタビューしようと思った理由はふたつあります。ひとつは単純に一番仲の良い友達なので、気軽に質問ができ、会話も続きそうだと思ったからです。もうひとつは、彼はとても神経質な面があり、時々距離を感じることもありました。彼は今東京の大学にいます。大学生になって、高校のころはちょっと聞けなかったことなどいろいろと聞いてみたいと思い、インタビューの相手に選びました。まず一番にきいてみたいことは、やはり最近どうしてるかということです。大学に入ってから、夏に会ったりもしましたが、あまり長く時間もとれなかったので、今何をしているのか・高校の時から変わったことがあるかなど、いろいろとゆっくり聞いてみたいと思います。また、彼がゲームが得意な理由は高校のころも少し聞いたことがあります。今一度ゆっくり聞いてみたいと思ってい

ます。今はどのようなゲームをやっているのかというのも少し気になります。

3. インタビュー結果

自分:Q：最近高校の頃から変わったなと思うことは？

健介:やっぱ環境かな。高校とちがってバイトもできるよになったし。

自分:ちなみになんのバイトだっけ？

健介:てんやっという飲食店。吉野家みたいなもん

自分:バイトやり始めた時とか今のバイトの状況・感想とか

健介:バイト初めは接客とか、いちいち緊張してたなw言葉づかいとか、まあちょつとらぶったときの対応とか。この前は金足りない客きてかなり困った。まあ身分証名称があれば基本におk

自分:しょうめいしょう× しょうめいしょ

健介:それw

⇒高校生のころから一番変わったのは、環境だそうです。バイトのことが真っ先にでてくるあたり、結構バイト先が楽しいのだと思います。こういうところは基本的にまじめな性格なので、バイトも精力的に取り組んでいるんだと思います。証明書を「しょうめいしょう」と打ったため変換ができなかったようです。若干ボケてるところは変わってないみたいで、ほっとしました。たいした間違いではないですが、やはりこの小さなボケが彼の魅力の一つだと思っています。自分も1月までは飲食店でアルバイトをしていましたが、彼とは違い厨房のほうで、しかも関東圏とは忙しさなども違うと思うので、彼の経験談もとても興味深いものでした。勉強のほうは一口に楽しいとは言えないようですが、アルバイト先が楽しいようで、がんばり屋の彼らしいなと思いました。

自分:バイトでの周りからの・・・あだ名とか扱われ方とかどんな感じ？

健介:あだ名は特に・・・普通に佐藤くんかな。オレが働いているところはわりかし軽いほうでな。裏とか客がいないときは結構さわぐな。扱われ方は一部にはいじられキャラ・・・

自分:やっぱりいじられキャラwwまあやっぱり雰囲気察してしまうらしい

健介:さっき言ったタイムマネージャーになるとまあ自給がアップするんだけど、結構店長につぐ責任者みたくなるんで、まあ責任感とかそういうのがわく。まあ俺見たく、あんまサボりまんはできないなw

自分:よくサボるの？

健介:冗談w決められたシフトはちゃんとやりますともw

自分:そかw

⇒高校のころは、ガチャピンや鉄拳など結構さまざまなあだ名があったのですが、今は仕事先ということもあってあだ名らしきものはないようです。でもやっぱりいじられる側のようで、性格などは高校からまったく変わってないようで安心しました。私はそこまで彼

をいじるほうではなかったのですが、彼は高校のころからずっといじられていました。「サボリまん」という彼特有の言葉遣いも健在のようです。意味は通じますが、なかなか聞かない表現です。こどもには喜ばれそうですね。この独特の言葉づかいがあるからか、彼と話していると飽きません。

自分:また話戻すけど、自分を変えられるとしたらどんなキャラがいい？

健介:ん～変えよう変えようといってきたけど、正直これ以外の自分が想像できないなw
クールなオレは自分でもキモイしw

⇒キャラ(性格)を変えたいとよくいっていましたが、あまり具体的な想像はなかったようです。クールな自分はあまり気に入らないそうですが、やはり彼にはあのままの性格でいてほしいです。

自分:癖とか、性分とか細かいところで変えたいとか直したいとかある

健介:恥ずかしいとなんか口元隠す癖がある気がする。発表とかのたびにそれやってちゃいかんだろ。まあ多少人前でも堂々とできるようになりたいしな。なんというか、前から手が震えるだろオレ。そのせいでできれば人前に出たくないって言う気持ちがあったり、まあそれをごまかすために口元に手を持っていくのかもな

自分:なるほど、口元に持っていく手も震えてるしな。

健介:これが「けいしょうえん」なのか、

自分:けいしょうえん?? けんしょうえんでなく？

健介:それw

健介:もしくは小さい時に人前にトラウマでも持ったかだな、結構そういうのが原因ってテレビでやってたと思った。飲み会でコールかかると震えるからマジで困るね。ばれないように結構勢いつけたりすっけど。

⇒彼は人前にでると手が震えてしまうのですが、それを結構気にしているようです。確かに彼は人前にでると一目でわかるくらい手が震えますが、私はそこまできにしていなかったの、彼が気にしていと聞いて少し意外でした。彼が中学のころに生徒会長をやったときは先生からの推薦でなったので、まわりからの期待などもあって、挨拶のときなどのときはかなり緊張していたようです。それが原因で人前にでるのを嫌うのかもしれないと自己分析しています。高校では私のほうが生徒会長を経験したので彼の気持ちもわかるのですが、がんばれば少しずつ慣れていくので、前向きに頑張ってもらいたいです。将来困らないといいのですが。また、腱鞘炎を「けいしょうえん」だと思っていたようです。短い会話の中でも小さなボケが光ります。

自分:初めてやったゲームは何？何歳くらいのころ

健介:初めてはファミコンのマリオだったと思う。幼稚園前かな・・・?ホント初めのマリオ。兄貴がやってたんだけど、2コン持たせてもらっていて兄貴がやられたら俺のとコントローラー変えて、ずっと兄貴のターンみたいな感じでさ。でも幼いオレは自分がプレーしていたと思っていて、いざやらせてみると敵の配置やら覚えてたという感じ。普通にうまかったらしいb まあそれが初めのゲームだなw その後はロックマンやらなんやらクリアしまくりよb 幼稚園のときねw

⇒幼稚園のころからのゲーマーという驚きの回答が返ってきました。自分もロックマンなどは小学校のころにやったことがあります。まったくクリアできませんでした。彼はお兄さんはそこまで好きではないようですが、彼がゲーム得意なのはお兄さんのおかげのようです。敵の配置を覚えていたということはとても集中力のあり、記憶力を発揮できる幼稚園児だったのでしょう。

4. まとめ

今回のインタビューを通して新しい発見を二つしました。ひとつは、彼はかなり早い時期からゲームが得意であったということ。もうひとつは私が思っている以上に人前にでることに苦手意識を持っていることです。人前にでるのが苦手なのは、がんばって直していければと願っていますが、そのように真剣に悩んでいるのが彼らしく、彼のいちばんいいところだと思います。慎重で疑り深く自分に厳しい。私にはない長所です。そしてその反面、口調が軽く、ときおりボケが入る彼との会話もかわりなく、懐かしく思います。私が彼と長く付き合っている理由はこの軽さにあるのだと自分では思います。自分もどちらかといえば軽い口調・雰囲気なので、似ているところがなじみやすかったのだとも思います。逆に彼の神経質な部分は私にはなく、むしろ正反対な性格だと思います。とても似ている性格と全く似ていない性格がありますが、おそらくもっと突き詰めれば、全く似ていない性格が多いのだらうと思います。似た者同士よりも似ていない者同士のほうが気が合うのかもしれないと今回のインタビューを通して思いました。現在勉強のほうもかなり大変なようですが、彼らしさを残したまま大人になってくれることを願います。

5. 感想

<日本事情Ⅱを受けて>

日本事情Ⅱの最初の授業では、ほかの授業にない取り組みで最初からとても興味をひかれました。グループで行う活動や、自分で相手を選んでその人にインタビューをするという活動など、すべてが初めてのことで心配もありましたが、とても有意義な時間であったことが、この最終レポートをまとめてみて改めてわかりました。

ほかの講義と違うために戸惑う人も多いかと思いますが、これからもぜひ続けていってほしいと思っています。

日本事情

G14 松岡諒

目次

1. インタビュー相手の決定理由について
2. インタビュー相手の魅力・インタビュー相手とのエピソードについて
3. 本藤君へのインタビュー
 - 3-1 わたしの家にて
 - 3-1-1 秋田に来て困ったことについて
 - 3-1-2 本藤君の趣味 ペースについて
 - 3-1-3 バンドのCD レコーディング・デビューについて
 - 3-2 定食屋にて
 - 3-2-1 定食屋で良い楽器について
4. 結論
5. 「日本事情Ⅱ」を振り返って

1. インタビュー相手の決定理由について

わたしは、友人のひとりの本藤君にインタビューしよう決めました。本藤君は千葉生まれでわたしは同じソフトテニス部に所属しています。なぜ、本藤君にインタビューすることに決めたかという、インタビュー相手を考えているとき、わたしは秋田に来て、最初のうちは秋田の方言で何を言っているかわからない言葉やイントネーションの違い、習慣の違いに少し苦労したことを思い出しました。また、初めての一人暮らしで家事などにもかなり苦労しました。このことについて、本藤君ともそのことについて話をしたことがあるのですが、彼も同じように苦労したと言っていました。そのことについて詳しくききたいと思い、彼に決めました。

2. インタビュー相手の魅力・インタビュー相手とのエピソードについて

わたしは何度か本藤君の家に行ったことがあるのですが、彼の家を始めてみたときのことを今でも覚えています。それはわたしが今まで見たことのある、どの家とも違っていただけです。言葉でその衝撃を表現するのはかなり難しいです。色々驚くべきところがあったのですが、一番驚いたことは、家の色々なところに小銭が当たり前のように落ちているのです。しかもそれを指摘しても彼は全く拾おうとしませんでした。後日、本藤君の家に行った時、掃除をしたんだと本藤君は言っているのですが、不思議なことに小銭は落ちたままです。正直、家に小銭が落ちていて平気なんて、わたしにはいまだに理解できません。

彼のエピソードはまだまだあります。本藤君から部活の何人かで本藤君の家でカレーパーティーしよう誘われたときのことを話します。わたしは始まる前から彼の家でカレー…と不安でした。もちろんみんな小銭に驚きました。ですがその後パーティーが始まった瞬間みんなはあることに気付きました。みんなが気付いたこととはそのカレーはカレーの味がしないということです。カレーは市販のカレー粉を入れて作れば多少は違うにしても、カレーの味になるはずなのですが、彼のカレーは特別なものをなにも入れていないのにカレーの味が全くしないのです。みんな爆笑でした。

他の友達の家で同じようなことをしたときも、本藤君は皿をひっくり返し、コップをひっくり返しでいつも本藤君の行動にみんな笑いが止まりません。

いつもみんなを笑わせてくれる本藤君ですが彼が別人のようにカッコ良くなる時があります。それは彼がベースを手にしたときです。彼はテニス部以外に軽音部にも所属しています。彼は高校から軽音部でとてもベースがうまいのです。秋田に来てからも何度も何度かライブをしたそうです。わたしはまだ彼のライブを見に行ったことはないのですが、一度だけ彼のベースを聞いたことがあります。彼が弾き始めたその瞬間、自分でも信じられなかったのですが、震えが走ったのです。わたしは音楽について全然詳しくないので、他の人の参考になるとは思いませんが彼のベースが上手いのは間違いありません。いつか彼のライブに行ってみたいと思っています。

本藤君はいままでわたしが今まで出会ってきたことのないタイプの人で一緒にいて飽きません。正直、時々イライラすることもあります。彼は彼にしかないものをたくさん持

っていると思います。

3、本藤君へのインタビュー

1、日付：2008年12月09日

2、場所：わたしの家・定食屋

わたしの家にて

3-1-1 秋田に来て困ったことについて

わたし：本藤君が秋田に来てから困ったことは？

本藤君：前言ってた独り暮らしのこと？実は俺浪人時代も一人暮らしだったから洗濯とかはそんなに困らなかったな。でも実習先で（ちなみに本藤君は医学科です。）何を言ってるのかわからなかったときは、大変だったな。

わたし：ってか浪人中も一人暮らしだったんの知らなかった。本藤君も言葉はやっぱりわからなかったんだ。俺も実習で何を言っているか、わからなかった。それに家決める時もタクシーの運転手が何言ってるかわからなくて、本当に困った。

本藤君：そうそうタクシーも困ったわ。そっか諒もか。

わたし：他には困ったことなかった？でもまあ、本藤君は料理とかほとんどしないもんね。

本藤君：洗い物がめんどくさいからね。作るのは好きなんだけど…。

わたし：俺も作るのは大好きだけど、確かに洗い物は面倒だね。本藤君料理好きなんだ。そういえばカレーもすごかったもんね。（笑）

本藤君：うるさい。あれは忘れて。

（さすがの本藤君も気にしているようで少し不機嫌そうでした。その反応もとても面白かったです。）

わたし：はいはい。いつも本藤君料理作らないけどいつも何食べてるの？

本藤君：カップラーメンとかに湯をそそいだりするのもめんどくさいから弁当買ってきて食べたり、外食したりしてるよ。

わたし：自炊しろよ。ちょっとは節約しろって。

本藤君：諒がケチすぎなんだよ。そういうの周りの人にもなんとなく雰囲気が出るらしいから気をつけないと。

（本藤君の方から、ちょっと意地悪な顔でからかってきたので彼もそんな顔するんだと新しい彼の一面を発見することができました。）

わたし：…。じゃ俺そういうの出てる？

本藤君：うーん。俺は諒が節約してるの知ってるからね。わかんない。

（自分で話題をふってきたにも関わらず、興味なさそうに反応するのでちょっとイラッとしました。）

わたし：たぶん俺の方が普通だと思うけど。（わたしもすこしムキになってしまいました。）

本藤君：まあいいじゃん。話題を変えようよ。

3-1-2 本藤君の趣味 ベースについて

わたし：………じゃ、ベースのこと話そっか。

(え…さっきの話、気になるんだけど…としましたが彼の雰囲気にもまれてしまい話を変えることになってしまいました。)

本藤君：いいね。俺が今本当に一番楽しいことなんだよ。医学科1年3人でバンド組んだんだけど週4くらい練習してるよ。(本藤君はとても楽しそうに話をしていました。)

わたし：そっか。バンドもいいけどテニスにも来いよ。まあその話は今度でいいや。バンドはどんな感じなの？

本藤君：信じられないくらい順調だよ。また次のライブも医学科からも何人もきてくれるらしいし。

わたし：俺も行ってみようかな。本藤君がチケットくれるなら。

本藤君：そこは自分で買えよ。(またケチだと言われるかなと思っていたのですがさっきのことはなかったかの様にスルーでした)

わたし：行くことになったら買うかも…。ライブってどんな感じなの。缶投げてくるような奴とかいないの？俺行って投げてみようかな。(笑) そんなことしたらもう本藤君との仲は修復不能になるね。(笑)

本藤君：そんな奴いないよ。もし諒がそんなことしたら、修復不能になるかはわからないけど、後で3時間くらいお説教すると思う。本当に。

(彼がかなり本気な顔をして言うので、彼は本当にバンドのことが大好きなんだとわたしは感心しました。)

わたし：そんな真剣にならなくても…俺がそんなことするわけないじゃん。

本藤君：そうだけど…まあいいや。あと俺たちレコーディングとかもするつもりなんだよ。

3-1-3 バンドのCDレコーディング・デビューについて

わたし：え？すごいじゃん。CD作るってことだよな。

(わたしは音楽に詳しくない他の人はどう思うかわかりませんが、CDをつくるということはCDを売るということで、CDが売れるということは自分たちの作品を誰かが評価して、認めてくれるということなのです。なので彼はそんなにすごいんだとわたしは本当に驚きました。)

本藤君：まあ店で売るわけじゃなくてライブとかで売っただけだけどね。

わたし：それでもすごいよ。でも秋田でレコーディングする場所とかあるの？

わたし：探してもなかったら東京でするんだ。メンバーの1人が東京出身だからそこらへんは詳しんだ。あとレコーディングを秋田で出来たとしても、東京とそれと俺の地元の千葉でライブするつもりなんだ。

わたし：本当すごいじゃん。じゃ例えば東京とかでライブやってるところでスカウトとかされたら、どうするの？

本藤君：それはないって。

わたし：例えばの話だって。学校辞めてそっちの道に進んだりはしないの？

本藤君：それは絶対ないよ。俺は医者になることの方が大切なんだ。

わたし：そっか。じゃメンバーの2人が乗り気でも？

本藤君：だったら、俺は脱退するよ。

(本藤君の真剣な表情に彼の意志の強さが伝わって来ました。)

わたし：…そうなんだ。そういえば、まだバンドの名前聞いてなかったよね？何ていうバンドなの？

本藤君：パンクバンドの名前だからちょっと変わってるんだ。だから教えない。

わたし：なんでだよ。まあ今度ライブ見に行くか、ライブに見に行った人に聞くからいいよ。

(なんかこれ以上聞いても教えてくれないというのがわかりました。彼は変なところで頑固なところもあるのです。)

本藤君：ライブに来いよ (笑) そろそろ飯食う時間だし今からから飯行かない？

わたし：またそうやって金を使う。でも今、冷蔵庫空だしたまにはいいか。

…その後インタビューの続きは駅前の定食屋にて

3-2-1 定食屋で良い楽器について

本藤君：諒は楽器とか始めよう思ってる？

わたし：予定ないな。

(全くそんなつもりはなかったのでもそんな話をされてもと内心焦りました。)

本藤君：もし始めるんなら楽器は安いのがいいよ。ちょっと高くてもいい物を買わないと。

(彼が真面目に話すので、興味はないけど話をきいてみようと思いました。)

わたし：安物とそれなりのものってそんなに違うの？

本藤君：全然違うよ。俺は最初一万くらいの買っちゃって失敗したんだ。だから新しく始める人には俺みんなにこう言ってるんだ。

わたし：じゃあ今使っているのはイクラくらいだった？

本藤君：中古で十万ぐらい。新品だと三十万くらいするものだから、一生物になるくらい、いい物でいい買い物したと思ってるよ。

わたし：十万か。やっぱり楽器は高いね。あと、こういうところに1人で来たりしてるの？

本藤君：そうだね。俺そういうの気にしないから。浪人時代は1人で回転寿司に行ったことも何回かあるよ。

わたし：…。(わたしにはできないなと思いました。)

本藤君：(店員さんが料理を持ってきてくれました。) おお。来た来た。まあもう飯来たし終わりにしない？

わたし：そうだね。ありがとうね。

4、結論

インタビューを通して、本藤君について、今まで知らなかった魅力について発見することができました。最初の目的である本藤君が秋田で困ったことについて聞くことでしたが、インタビューをする内に本藤君の趣味について聞くことが一番の目的になっていました。ですが、その結果よりたくさんの発見ができたのではないかなと思います。

まず、本藤君のどこに惹かれているのか発見することができました。本藤君はインタビューのときほとんど穏やかというか、優しいオーラを出していたのですが、バンドの話のときはかなり真剣で、わたしと話をするとき目を決して逸らしませんでした。いつもの本藤君とは違う熱いオーラというか本気度がひしひしと伝わってきました。そういうすごいギャップがあるところが、わたしが今まで出会ったことがないタイプの人だと感じた一番の要因なのではないかと思います。わたしはそれほど雰囲気が変わる人、カッコいいなど思える人に会ったことがありませんでした。また、わたし自身は本藤君のバンドほど本気で語れるものはありません。本藤君がわたしにない大切なものを持っているところに一番魅力を感じ、一番惹きつけられ、尊敬しているのだなと気づきました。わたしは彼といると何か夢中になれるものを見つけようと思え、向上心を持つことができるのです。自分も成長できる気がするのです。ですがそう思えることに今まで全く気づいていませんでした。彼をインタビューすることで自分について知ることもできました。

また、彼はバンドのことはもちろん大好きなのですが、自分の将来や、方向性を決して見失っていません。普段は穏やかで何も考えてなさそうな本藤君ですが、自分という芯をしっかり持っているのです。そこがまた尊敬できるところなのです。

5、「日本事情Ⅱ」を振り返って

わたしは日本事情を通して本藤君について再発見すると同時に自分自身についても再発見することができました。もちろんレポートを書きながらや、インタビューをしながらも、自分で情報を整理することで、色々な発見することができました。ですがグループのメンバーと話をしているときにもたくさんの発見をすることができました。わたしは今まで日本事情のように自分の書いたものについて人と話をするという機会がありませんでした。しかし、今回そういう経験ができて本当によかったです。さらに他のメンバーの話聞くことも面白かったですし、色々な人の人生の一部や大切なものについて知ることができました。

日本事情を通して貴重な体験をすることができました。牲川先生をはじめ、松林さん、G14のメンバーのみなさんありがとうございました。